

みんなの顔が見えるまち

人権シリーズ vol.13



「子どもの命と人権」

春の交通安全運動が始まり、安岐総合支所前のスタート式で、西安岐幼稚園年長組の園児の皆さんが誓いのことばを元気に大きな声で暗唱しました。その姿に「どうぞ事故もなく大きく育つて」と祈った一刻の朝、また小さな子どもの命が奪われました。しかも産みの苦しみの末、この世に生を受けた我が子を虐待し母親の手によって尊い命が奪われたという報道を聞き、涙が止まりませんでした。何とむごいことだろうか。その子にとって幸せになる権利、元気に育つていく権利が断られたのです。その子に思いを馳せるのは私だけではないと思います。

私の周りにも、子どもが欲しいと切実な思いのご夫婦がおられ、大の子ども好きな私の弟夫婦には、こうのとりはやって来ませんでした。そんな例を見る・聞くにつけ、少子化が叫ばれている今、乳幼児の命が更に尊いと思うし、ほんとうに悲しい。熊本市内の慈恵病院が昨年秋、『このとりのゆりかご』構想を明らか

にしてから、『ゆりかご』は揺らぎ続け、全国的に耳目を集めていました。そして最近『赤ちゃんポスト』（このとりのゆりかご）が設置されました。新生児の命と生きる権利が守られることは何物にも代え難いことだと思います。しかし、たとえ預けられた子どもの命が救われたとしても、『預かった命の成長をどう見守り、支えていくのか。命が救われることは、決して最終的な解決策ではなく、その子どもの人生の始まりに過ぎない。子どもたちはいつか自分探しの旅をする。』という大変重大な問題が考えられる」と、行政の立場から児童福祉の現場で27年間、親のいない乳児の養育にかかわってこられた熊本県の潮谷義子知事は、『ゆりかご』の問いかけ」という新聞記事で述べておられます。この記事を拝読し、一昨年「ボランティア熊本大会」での潮谷知事の柔和なお顔が浮かんでまいりました。

私にも6人の孫がいて、上は高校2年生、下は1歳半と幅広く育っています。特に1歳半の孫娘は言葉も少しずつ覚え、音楽のリズムに合

わせ、お尻を振り振り踊るしぐさに皆笑いころげます。難産のため帝王切開で無事生まれたときは、神仏に感謝いたしました。「この感動を絶対に忘れてはダメよ」と二女に言い聞かせたのは、いうまでもありません。この孫娘が成人するころには、私は80歳半ば。それまで元気で生きねばと、夫の育てた新鮮野菜を食べ、魚・肉をバランスよく摂り、生きながらえる権利をたのしみだと思っています。

国東市地域婦人団体連合会

会長 本多ノリ子

